

中国地方の大学女子バスケットボールはなぜ 全国に通用しないのか？

——他地区の強豪チームとの比較から——

Why Can't the Women's Basketball Teams in Chugoku District
Win the Games "Inter College Tournament"?

和田 崇・緒方佑衣

分野：地理学

キーワード：スポーツ，中国地方，競技力，キャリア，意識

- I はじめに
- II 地区組織およびチームの運営実態
- III 選手のキャリア
- IV 選手の意識
- V 結論

I はじめに

人文地理学は従来，経済や社会，政治を主たる研究対象としてきた一方で，スポーツに対しては十分な関心を払ってこなかった (Bale, 2003)。これに対して Bale (2003) は，スポーツは身体運動としての行為というだけでなく経済的，社会的，政治的要素が組み込まれていることと，空間や場所がスポーツにとっても重要な概念であることから，スポーツを地理学の研究対象として積極的に取り上げることが有用だと提起した。そして彼は，2003年に著した『スポーツ地理学』において，近代スポーツの地理的伝播，スポーツの経済的・社会的効果，スポーツ施設やクラブの立地，スポーツの文化的側面，スポーツを通じた地理的イメージについて言及した。また Terrell (2004) は，スポーツとレジャーを地理学的に捉える必要があると指摘し，スポーツの経済的・社会的効果，スポーツと自然環境との関係，スポーツ活動の分布と地域差を取り上げた。

また彼らは、スポーツの性格が異なれば、それをめぐる場所や空間は異なる特徴を示すと考え、スポーツの性格に応じた研究が求められると指摘している。Bale (2003) は、地理学における従来のスポーツ研究がレクリエーションとしてのスポーツを主に扱ってきたとしたうえで、成績重視のトップクラスのスポーツを対象に加える必要があると指摘した。Terrell (2004) は、スポーツを「日常的に行われるもの、組織的に参加するもの、身体的および精神的な向上をめざすもの、他者とのコミュニケーションを楽しむもの、大会や試合で良い成績をあげることをめざすものなど、あらゆる目的や形式を含んだ身体運動」と定義し、それらをレジャーあるいはレクリエーションとして行われるものと仕事として行われるものに大別した。

日本の地理学では、スポーツはレジャーの一つとみなされる傾向が強く¹⁾、山村研究や観光地理を中心に研究が蓄積されてきた。またそれらは、屋外で行われるスポーツが中心であることと、スポーツ活動の導入・展開による地域の変容を主に扱っている点に特徴がある。具体的に、スキー場の立地に伴う地域の変容を捉えた研究 (白坂, 1986; 呉羽, 2009a; 2009b; 花島ほか, 2009), テニス民宿観光地の形成過程を明らかにした研究 (井口, 2009), スポーツ合宿の活発化に伴う地域の変容を明らかにした研究 (新藤ほか, 2003) などがあげられる。また、スポーツが行われる場所や地域に加えて、スポーツ店やスポーツを取り上げるメディアをスポーツ空間の一部とみなしたり (小長谷, 2009), 女性向けのスポーツ空間が形成されていることを示したりする研究 (神田・杉本, 2009) もみられるようになってきた。このほか、Bale (2003) や Terrill (2004) が示した、スポーツの地理的伝播 (佐藤, 2009), スポーツの経済波及効果 (川久保, 1997), スポーツクラブの立地と利用実態 (山崎・高阪, 1996; 2000; 守屋, 2006), スポーツと自然環境とのかかわり²⁾ に関する研究も散見

- 1) 神田 (2009) は、『レジャー白書』に基づいてレジャーの種類を分類し、その一つにスポーツ部門を位置づけている。そこには、ジョギング・マラソンから体操、サイクリング、サッカー、武道、ゴルフ、テニス、釣りなど、さまざまなスポーツ活動が含まれている。
- 2) 2000年7月に発行された雑誌『地理』は「スポーツと地形」が特集となり、自転車競技、マラソン、スキー、ゴルフ、自動車レースを例に、それらのコース設定と自然地形、気象などの関連が言及された。

2011年6月 和田 崇・緒方佑衣：中国地方の大学女子バスケットボールはなぜ全国に通用しないのか？

される。

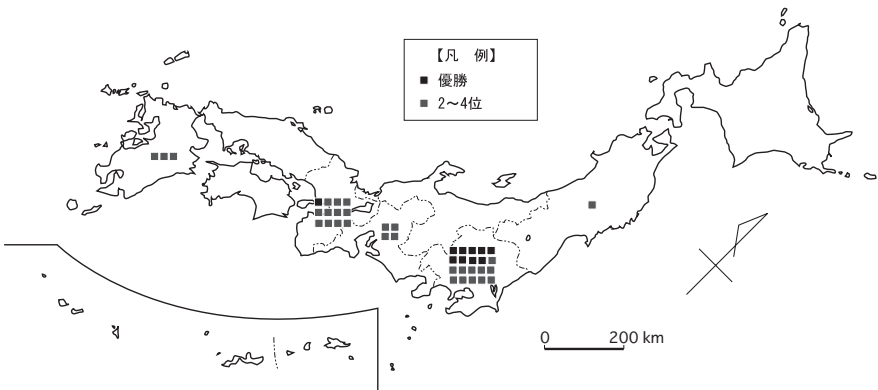
これらの研究は、スポーツが行われる場所や地域の姿を明らかにするものといえる。その一方で、スポーツ活動の地域差に関する研究は、管見の限り、呉羽（2002）のみである。彼は競技人口を指標としてスキー行動の地域差を分析し、スキー人口はスキー場の多い積雪地域に近接し、流行に敏感な大都市に多く分布することを明らかにした。しかし彼の研究は、スキーをレクリエーションと捉えており、Bale（2003）が指摘したトップレベルのスポーツを対象としていない。また、積雪地域に偏在するスキー場で行われるスキー競技を対象としており、自然条件にかかわらずに実施可能な競技とは異なる結果を示すことは容易に想像できる。また、スポーツ活動の地域差をみていくうえで、競技人口以外にも、組織数や施設数、競技成績、トップアスリートの輩出状況などを指標とすることも有用と考えられる。

地理学以外では、体育学や教育学において、スポーツ活動の地域差に関する研究がみられる。新堀編（1973）は国民体育大会の成績を指標として、スポーツの競技力を都道府県別に分析し、種目ごとに競技力の高い県が異なることを示した。また田中（1975）と松下（1978）は、組織剣道人口や有段者数を指標に、九州地方を剣道が活発に行われている剣道普及圏と推定した。また田中ほか（1977）は、大学進学に際して、九州に代表される剣道普及圏から関東の大学へと、組織剣道人口の移動現象が生じていると報告した。これらの研究にみられる分析の視点や方法は、地理学がスポーツ活動の地域差を分析するうえで参考にすることができよう。

以上を踏まえ、本研究は、自然条件にかかわらず実施可能な屋内競技を例に、競技成績を指標としてスポーツ活動の地域差を把握するとともに、それが生じる要因を明らかにすることを目的とする。また本研究では、スポーツをレジャーあるいはレクリエーションとしてではなく、良い成績をあげることがめざして真剣に取り組むべき対象として捉える。具体的には大学の部活動として行われている女子バスケットボールを取り上げる。トップレベルのプロスポーツや企業スポーツでなく大学女子バスケットボールを対象とするのは、チーム

が大都市圏に偏在するプロスポーツや企業スポーツよりも全国に分散して立地する大学のほうが地域差を把握するうえで有効だと考えたことと、日本ではスポーツが学校体育を中心に発展してきた歴史を持っており、日本スポーツの特徴を浮き彫りにすることができると思ったためである。

本研究の主たる対象地域は中国地方とした。中国地方を選んだ理由は、筆者の一人である緒方が中国地区リーグに加盟する徳山大学女子バスケットボール部に所属していたことのほかに、全日本大学バスケットボール選手権大会（女子）（以下「インカレ」という）において、関東地方や関西地方、東海地方の大学が毎年好成績を収めるのに対して、中国地方の大学は良い成績をあげることができず（第1図）、その活動実態を明らかにすることで、競技成績の地域差を生み出す要因を明らかにすることができると思ったことにある。また、女子バスケットボールに限らず、あらゆる種目で中国地方の大学運動部の競技力は近年低下傾向にあり、その要因として関東地方や関西地方の有名大学への有望選手の流出や厳しいイメージのある運動部が敬遠される傾向にあることが指摘されており（中国新聞、2009年7月19日）、このことについて、中国地方の大学スポーツの実態をより詳細に明らかにしようと思ったことも理由の一つである。



第1図 全日本大学バスケットボール選手権大会（女子）におけるブロック別ベスト4入賞回数（2001～2010年）

資料：『60年のあゆみ』ほかをもとに作成。

2011年6月 和田 崇・緒方佑衣：中国地方の大学女子バスケットボールはなぜ全国に通用しないのか？

本研究では、競技成績の地域差が生じる要因を分析するうえで、選手のキャリア³⁾と意識に着目する。選手のキャリアに着目するのは、剣道では競技力の高い選手が関東の大学に進学する傾向が強いという田中ほか(1977)の指摘などを踏まえ、女子バスケットボールでも同じ状況がみられるのではないかと考えたためである。また、選手の意識に着目するのは、選手の高校までのキャリアの違いが大学における競技に対する意識の違いを生み出す一因となっている(小林, 2002)という指摘を踏まえ、そのことを検証しようと考えたためである。

本研究の実査は、資料調査とアンケート調査を併用した。資料調査では、全日本大学バスケットボール連盟『60年のあゆみ』をもとに、インカレの地区別成績などを整理した。アンケート調査は、中国地区の1部リーグに加盟する6大学⁴⁾および2009年度のインカレでベスト4に入賞した4大学のうち3大学⁵⁾の監督と選手を対象とし、各チームの強化戦略と練習方法、選手のキャリア、選手の競技に対する意識を調査した。調査は、中国地区の6大学には2010年9～10月に直接法で、他地区の強豪3大学には2010年10～11月に郵送法で行い、選手用アンケートは中国地区の6大学から105人、他地区の強豪3大学から72人の回答を得た。

以下、Ⅱでは中国地区および強豪3大学が所属する地区リーグの運営方法を整理するとともに、各大学の強化戦略および強化を進めるうえでの課題を示す。そのうえで、Ⅲでは選手のキャリアに、Ⅳでは選手の競技に対する意識に焦点をあてて、中国地区の大学と他地区の強豪3大学の共通点と相違点を示す。最後にⅤにおいて、Ⅱ～Ⅳの分析結果を踏まえ、中国地区の大学がインカレで勝てない要因と思われる点を整理する。

Ⅱ 地区組織およびチームの運営実態

1) 中国地区

全日本大学バスケットボール連盟は1949年に設立された大学バスケット

3) 本稿では「スポーツに関して行われる個人の諸活動とそれに伴う所属先や役職、およびそれらの変遷」と定義する。

4) 広島大学、島根大学、山口大学の国立3大学と、環太平洋大学と倉敷芸術科学大学、徳山大学の私立3大学からなる。

5) 関東地区の筑波大学、関西地区の大阪体育大学、東海地区の愛知学泉大学の3大学。

ボールの統括組織で、2009年度現在330大学が加盟している。同連盟は北海道から九州までの9つの地区連盟から構成されており、各大学のバスケットボール部は地区連盟に登録し、地区連盟が主催または主管する試合に参加する。その一つがインカレ予選であり、各大学はリーグ戦で好成績を収め、各地区連盟の推薦を得ることでインカレに出場することができる。

中国地区では2009年現在、26大学が地区連盟である中国大学バスケットボール連盟に加盟している。2009年度現在2部制が敷かれ、1部は6チームがリーグ戦、2部は残りのチームがトーナメント戦を行っている。インカレに出場できるのは1部リーグの成績上位2チームのみである。中国地区からインカレに出場するようになった第7回大会（1960年度）から第55回（2009年度）までの大学別出場回数をみると、広島大学が31回で最も多く、徳山大学の17回、岡山県立大学の15回、鳥根大学の13回がこれに続いている。年代別に比較すると、1980年代までは国公立大学の出場が多かったが、1990年代以降は徳山大学に代表される私立大学の出場が増加した。

また中国地区では、インカレ予選のほかにも、中国大学バスケットボール選手権優勝大会や中国大学バスケットボール新人大会、全日本総合バスケットボール選手権大会中国予選会など、実業団チームと対戦するものも含めて、数多くの大会が開催されている。また、三地区（中国・四国・九州）学生バスケットボール選手権大会や西日本学生バスケットボール大会など、近隣地区の連盟に所属する大学と対戦する機会もある。このことから、中国地区の大学は、中国地区内の他大学はもとより、中国地区の実業団チームや他地区の大学との試合経験を積む環境にあるといえる。

しかし、1部リーグ6大学の監督と選手を対象としたアンケート調査では、監督も選手も中国地区は各チームが競技力を向上させるために必要な条件を十分に備えていないと指摘している。まず一つは、関東地区（98校）や関西地区（57校）、東海地区（40校）などと比べて加盟チーム数が少なく、また1部リーグに加盟する大学間でも競技力に差が認められるため、他地区のように強豪校同士が切磋琢磨できる環境にないことである。いま一つは、大学の立地位置や

2011年6月 和田 崇・緒方佑衣：中国地方の大学女子バスケットボールはなぜ全国に通用しないのか？

交通条件など、中国地区の大学同士あるいは他地区の強豪大学との練習試合を行うにくい地理的環境にあることである。

次に、1部リーグ6チームの運営実態をみていく。まず、各チームが掲げる目標成績をみると、環太平洋大学がインカレ優勝、徳山大学がインカレ・ベスト8、広島大学がインカレでの勝利を掲げているが、他2大学はインカレ出場を最大の目標にしている。残りの1チームは競技成績を目標に掲げていない。また各大学とも、バスケットボールを通じて、努力することの大切さ、コミュニケーション能力、判断能力、他者への思いやりなどを身につけさせることを意識して学生の教育に取り組んでいる点は共通している。

競技の指導は、徳山大学と倉敷芸術科学大学は専任の教員または事務職員が、国立の3大学と環太平洋大学では外部コーチが行っている⁶⁾。練習計画は指導者が立案する大学がほとんどである。練習は各大学とも週5～6日行われており、練習時間は、1日平均1～2時間の島根大学を除き⁷⁾、各大学とも講義日は1日平均2～3時間程度、講義がない日は1日平均3～4時間程度であり、大学間の差は少ない。専任教員または事務職員が指導する2大学と外部コーチが指導する国立の1大学は指導者が毎回練習に来て指導を行っているが、残りの3大学では外部コーチが練習日全体の半分程度指導に来る状況にある。

強化遠征については、広島大学を除く5大学が行っている。遠征日数は徳山大学と倉敷芸術科学大学が年間15日程度で最も多く、山口大学が年間10日程度、環太平洋大学が年間7日程度で続いている。徳山大学と倉敷芸術科学大学の遠征日数が多いのは、指導する専任の教員または事務職員が引率しやすいためと推察される。遠征先は関東地区から九州地区まで広がっており、各地区の大学生や高校生と練習試合を行う大学が多い⁸⁾。しかし中国地区の各大学は、移動費用や移動時間の負担から、他地区への遠征を頻繁に行うことができず、それが思うように強化を図れない一因となっている。なお広島大学は、広島県

6) 環太平洋大学は2009年度から実業団チームの元・監督を外部コーチとして招聘している。

7) 島根大学女子バスケットボール部の部員は、試合などの遠征にかかる費用をアルバイトで稼いでいる。そのため、日々の練習時間を短くせざるを得ない。

に毎年、中国地区内外の高校や大学、実業団のチームが集まるイベントがあるため、その機会を利用して練習試合などを行っている。

選手獲得については、中国地区の6大学のうち、国立3大学はスポーツ推薦や指定校推薦などの入試制度がなく、一般入試で入学した学生が入部するのみである。そのため、部員確保に苦労したり、入部した学生も高校時代までの競技歴がまちまちで指導に苦慮したりするケースもある。一方の私立3大学は、スポーツ関連の学科やコースを設置して教員免許やスポーツ関連資格が取得できることをアピールしたり、スポーツ推薦や指定校推薦などの入試制度、さらには入学金や学費の減免制度を活用したりして選手の獲得に努めている。また、大学の監督が高校のバスケットボール部の指導者と信頼しあえる対人関係を構築したり、実業団チームの監督経験者を外部コーチに招聘したりしている。しかし、高校生の関東・関西志向が根強く、中国地区に立地するという理由で進学先として選ばれないケースが数多くみられるなど、各大学とも選手獲得に苦慮しているのが実態である。

2) 他地区

本節では、中国地区との比較対象として、インカレで毎年好成績をあげている関東地区と関西地区、東海地区をとりあげ、地区連盟の運営実態と各地区連盟に所属し、2009年度インカレでベスト4に進出した3大学の強化戦略を述べる。インカレでのベスト4進出回数が他地区を圧倒する関東地区は、男女別に地区連盟が組織されている。女子バスケットボールを統括するのは関東大学女子バスケットボール連盟で、2009年度現在98大学が加盟している。関東大学女子バスケットボール選手権大会と関東大学女子バスケットボールリーグ戦が主な試合である。このうちリーグ戦は、1部が8チーム、2部が16チーム、3部が23チーム、4部が51チームで行われ、上位8チームがインカレに出場する。ただし、インカレの前年度ベスト4入賞チームが所属する地区連盟から入賞チーム数だけ追加で出場できる規定となっているため、関東地区からは2部

8) 環太平洋大学のみ東海地区の実業団チームと練習試合を行っている。

2011年6月 和田 崇・緒方佑衣:中国地方の大学女子バスケットボールはなぜ全国に通用しないのか?

リーグに所属するチームを含めて9チーム以上が出場することが通例となっている。1部リーグに所属するチームはインカレで上位入賞を果たすチームばかりで、各チームとも関東地区の2大会とインカレで優勝することを目標に練習している。2部リーグに所属するチームでもリーグ戦で上位入賞を果たせばインカレに出場できることから、インカレ出場はもとよりインカレ優勝を目標に練習するチームがみられる⁹⁾。また関東大学女子バスケットボール連盟は、スポーツ用品メーカー2社が公式スポンサーとなっているほか、交通事業者やホテル、スポーツ用品販売店などがウェブ広告を掲載している。こうした協賛や広告は関東大学女子バスケットボール連盟の財政を支援しており、これらを財源に各種の試合や講習会が充実したかたちで運営されている。

関西地区も、関東地区と同様に、男女別に地区連盟が組織されている。関西地区の大学女子バスケットボールを統括するのは関西女子学生バスケットボール連盟で、2009年度現在57大学が加盟している。主な試合は全関西女子学生バスケットボール選手権大会と関西女子学生バスケットボールリーグ戦、関西女子学生秋季トーナメント大会、西日本学生バスケットボール選手権大会である。このうちリーグ戦は、1部が8チーム、2部が12チーム、3部Aが18チーム、3部Bが19チームで行われ、1部リーグの上位5チームがインカレに出場する。関東地区と同様に、関西地区もインカレの前年度ベスト4入賞チーム数が追加でインカレに出場するのが通例で、2009年度には2チームを加えた7チームがインカレに出場した。1部リーグに所属するチームの多くはインカレで上位入賞の経験があり、各チームは関西地区の主要大会およびインカレで優勝することを目標に練習している。

東海地区は、男女の大学バスケットボールを統括する東海学生バスケットボール連盟が組織されており、2009年度現在38大学40チームが加盟している¹⁰⁾。主な試合は東海学生バスケットボール大会と東海学生バスケットボールリーグ戦で、このうちリーグ戦は1部が6チーム、2部が6チーム、3部が28チームで行われ、1部リーグの上位3チームがインカレに出場する。東海地区は、日本

9) 筑波大学女子バスケットボール部選手の自由記述式アンケートへの回答による。

体育大学に続く18回のインカレ優勝経験を持つ愛知学泉大学や、2006年度インカレで準優勝した桜花学園大学が加盟しており、関東地区や関西地区に引けをとらない高い競技レベルでの試合が行われている。

次に、各地区連盟に所属する強豪3大学の運営実態をみていく。関東大学女子バスケットボール連盟に所属する筑波大学女子バスケットボール部は1952年に創部され、2010年度は25人の部員が所属している。また、部長・監督以下、アシスタントコーチ3人、トレーナー2人、ドクター1人の計7人のスタッフがいる。チームは関東地区の主要2大会とインカレでの優勝を目標としており、練習はAチームとBチームに分かれて週6日、各日2～3時間ほど行われている。同大学の専任教員である監督が練習計画を立案し、毎回練習に来て学生を指導している。出場試合は、主要2大会のほかにも日本体育大学との定期戦や、Bチームが出場するジュニア大会や関東甲信越大会などがあり、貴重な強化機会となっている。強化遠征は毎年4～6日程度行っており、東海地区の実業団チームと試合を行うことが多い¹¹⁾。また、スポーツ用品メーカー1社がウェブ広告の掲載などを通じて、サプライヤーとしてチーム運営を支援している。

関西女子学生バスケットボール連盟に所属する大阪体育大学女子バスケットボール部は、インカレ優勝と、実業団チームも参加する全日本総合バスケットボール選手権大会でベスト8に入賞することを目標に活動している。チーム練習は週6日、各日2～3時間ほど行われている。同大学の専任教員である監督が練習計画を立案し、毎回練習に来て学生を指導している。強化遠征は毎年10日程度行っており、東海地区の実業団チームと試合を行うことが多い。しかし選手獲得については、学費減免などの条件が整備されていないこと、国立大学や関東地区の有名私立大学と比べてブランド力が劣るなど不利な条件もあるこ

10) 愛知学泉大学はキャンパスごとにチームを編成し、それぞれが東海学生バスケットボール連盟に登録している。3つの愛知学泉大学チーム（愛知学泉大学、愛知学泉大学豊田校舎、愛知学泉大学名古屋校舎）のうち、全国学生バスケットボール連盟にも加盟し、インカレに出場できるのは1チーム（愛知学泉大学）のみである。

11) バスケットボール日本女子リーグ機構が運営するWリーグとW1リーグに加盟する13の実業団チーム（2010-2011シーズン）のうち、4チームが愛知県、1チームが静岡県を本拠地としている。

2011年6月 和田 崇・緒方佑衣：中国地方の大学女子バスケットボールはなぜ全国に通用しないのか？

とから、高校時代のチーム成績は良くなくても、個人として素質があると思われる高校生を個別にリストアップし、スカウトするなどの工夫を重ねている。

東海学生バスケットボール連盟に所属する愛知学泉大学女子バスケットボール部は、インカレ優勝を目標に日々の練習に取り組んでいる。チーム練習は週6日、講義日は1日3～4時間、講義がない日は1日5時間以上行われている。同大学の専任教員である監督が練習計画を立案しており、毎回練習に来て学生を指導している。また、部員全員が寮で生活しており、そのことによって、寮母が提供する食事を通じて栄養管理が徹底されるとともに、部員間のコミュニケーションが緊密化している。強化遠征は毎年25日程度行っており、関東地区や関西地区の大学や実業団、国体選抜のチームと試合を行うことが多い。しかし近年、大学が関東地区でなく東海地区に立地すること、大学に家政学部しかないこと、入寮を前提とすることが選手獲得上の不利な条件となっており、以前に増して選手獲得に力を入れるようになっていく。

以上にみたように、インカレで好成績をあげている関東地区と関西地区、東海地区のリーグは、強豪チームが複数加盟することから高い競技レベルで試合が行われており、強豪チーム同士が競い合う環境にある。また、各地区連盟に加盟する強豪チームは、インカレ優勝を目標にしている点、大学の専任教員が監督として練習計画の立案と指導を行っている点、東海地区に本拠をおく実業団チームと強化試合を行っている点などが共通している。さらに、関東地区では連盟やチームがスポーツ用品メーカーなどの支援を受け、それを活用して活動を充実させている。一方で、強豪大学でも関西地区と東海地区に立地することが選手獲得上のマイナス要因となっており、中国地区の私立大学と同様に選手獲得に力を入れていることも明らかとなった。

Ⅲ 選手のキャリア

1) 選手の出身地と競技歴

第2図は、大学女子バスケットボール部員の都道府県別出身地について、中

国地区1部リーグ加盟6大学と関西地区の大阪体育大学、東海地区の愛知学泉大学の別に示している¹²⁾。中国地区の6大学を合わせてみると、広島県が19人(回答者数全体の18.4%)で最も多く、これに次いで福岡県が16人(同15.5%)、岡山県が8人(同7.8%)、鳥取県と島根県が各6人(同各5.8%)が多い。地区別にみると、中国地区が49人(同47.6%)と最多で、九州地区が30人(同29.1%)、四国地区が12人(同11.7%)でこれに次ぐ。すなわち、中国地区の大学女子バスケットボール部員は地元である中国地区の高校から進学した者が約半数を占めており、その他に九州地区や四国地区など西日本の出身者が多いことがわかる。大学別にみると、島根大学は鳥取県および島根県、山口大学は山口県の出身者が大多数であるのに対し、広島大学と私立3大学は中国地区各県や九州地区をはじめ他地区の出身者が多い。

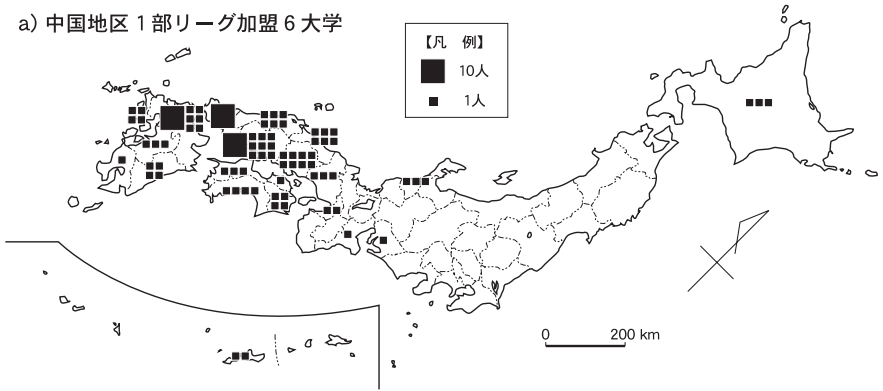
大阪府に立地する大阪体育大学女子バスケットボール部員の出身地は、大阪府が12人(回答者数全体の33.3%)と最多で、兵庫県が4人(同11.1%)、岐阜県と広島県が各3人(同各8.3%)でこれに次ぐ。地区別にみると、関西地区が19人(同52.8%)と最多で、東海地区が6人(同16.6%)でこれに続いた。また、愛知県に立地する愛知学泉大学女子バスケットボール部員の出身地は、愛知県と石川県、三重県、兵庫県が各2人(回答者数全体の14.3%)、その他6府県が各1人と分散している。ただし、地区別にみると、東海地区は6人(同42.8%)を占めており、大阪体育大学と同様に、大学が立地する地区の出身者が多いことがわかる。

第3図は、2001年から2010年まで10年間の全国高等学校総合体育大会バスケットボール競技大会(女子)(以下「インターハイ」という)における都道府県別ベスト4入賞回数を示している。これをみると、東京都と愛知県が7回と最多で、これに次いで神奈川県と福岡県が5回、愛媛県が4回と多い。その一方で、東北地区や北信越地区、関西地区、中国地区の高校はインターハイでベスト4に進出した回数が0～1回で、高校の競技レベルがあまり高い地区とはいえない。第2図と第3図を合わせてみると、中国地区の6大学は高校の競

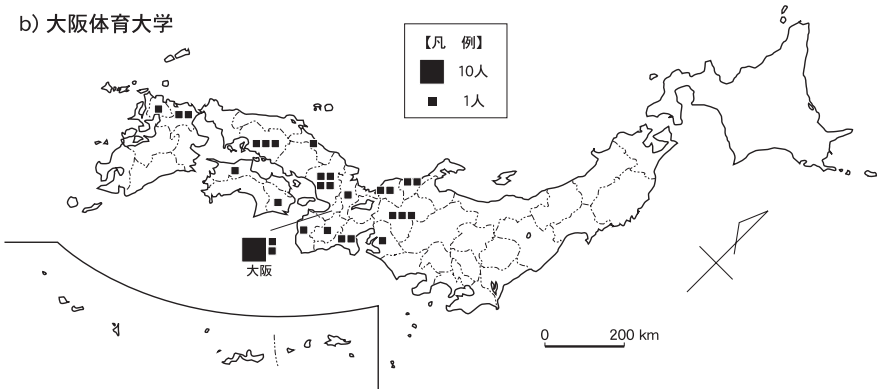
12) 筑波大学は無回答のためデータなし。

2011年6月 和田 崇・緒方佑衣：中国地方の大学女子バスケットボールはなぜ全国に通用しないのか？

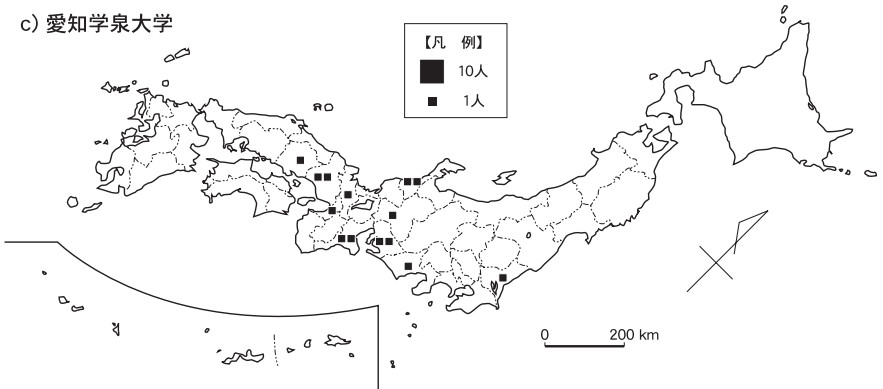
a) 中国地区1部リーグ加盟6大学



b) 大阪体育大学

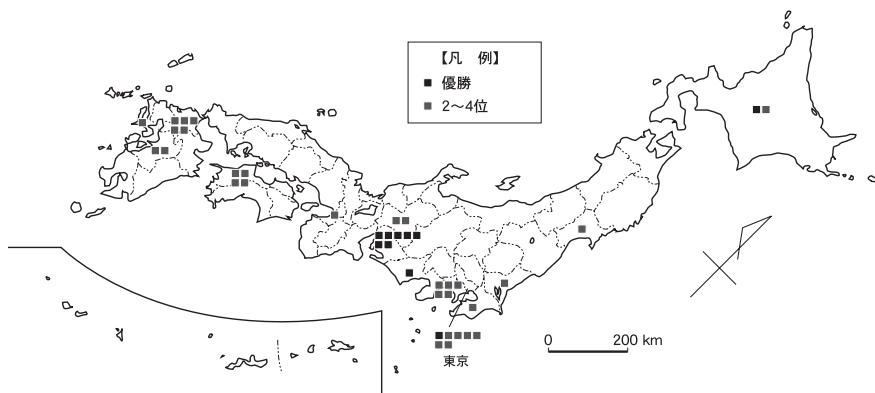


c) 愛知学泉大学



第2図 大学女子バスケットボール部員の都道府県別出身地（2010年）

資料：アンケート調査をもとに作成。



第3図 全国高等学校総合体育大会バスケットボール競技大会（女子）
における都道府県別ベスト4入賞回数（2001～2010年）

資料：BASKETBALL ZINEクラブのウェブサイト（<http://www.basket-zine.com/>）
（2011年1月31日閲覧）をもとに作成。

技レベルが高くない中国地区の出身者が約半数を占めているものの、福岡県や愛媛県など高校の競技レベルが高い県の出身者も多く在籍している。大阪体育大学は高校の競技レベルが必ずしも高くない関西地区の出身者が過半数を占めるが、高校の競技レベルが高い東海地区の出身者も比較的多い。愛知学泉大学は高校の競技レベルが高い東海地区の出身者が最も多い。以上から、愛知学泉大学は高校の競技レベルが高い地元の東海地区から多くの学生を受け入れているのに対し、大阪体育大学や中国地区1部リーグ加盟6大学は、高校の競技レベルが必ずしも高くない地元地区の出身者の数が最も多いものの、大阪体育大学は東海地区、中国地区の大学は九州地区や四国地区といった、高校の競技レベルが高い近隣の地区から比較的多数の学生を受け入れていることがわかる。

次に、中国地区1部リーグ加盟6大学と他地区の強豪3大学の別に、在籍部員の高校時代の都道府県大会での最高成績を比較すると（第1表）、いずれも「優勝」と回答した者の比率が最も高かった。ただし、その比率を比較すると、中国地区の6大学が回答者数全体の37.5%であるのに対し、他地区の強豪大学は同49.1%であり、他地区の強豪大学が10ポイント以上高い数値を示している。また、ベスト8以下を比較すると、中国地区の6大学は同32.9%であるの

第1表 大学女子バスケットボール部員の高校時代の最高成績
(都道府県大会)

区 分	中国地区 1部リーグ 6大学		他地区の強豪 3大学	
	人数 (人)	比率 (%)	人数 (人)	比率 (%)
優勝	33	37.5	28	49.1
2位	9	10.2	10	17.5
ベスト4	17	19.3	10	17.5
ベスト8	15	17.0	5	8.8
ベスト16	12	13.6	0	0.0
ベスト32	2	2.3	4	7.0
回答者数合計	88	100.0	57	100.0

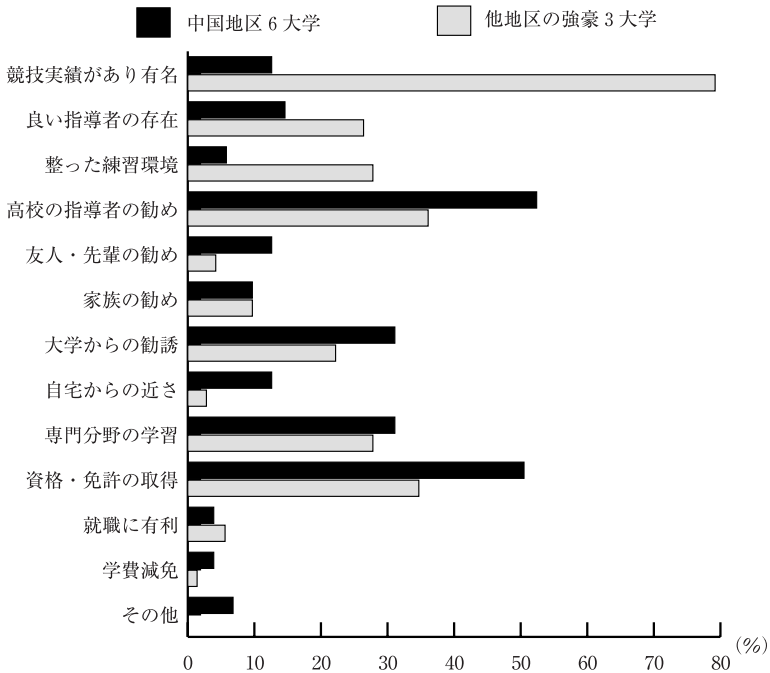
注) 比率は小数点以下2桁を四捨五入したため、合計値が100.0%にならないことがある。

資料：アンケート調査をもとに作成。

に対し、他地区の強豪大学は同15.8%にとどまっており、このことから、他地区の強豪大学のほうが中国地区の6大学よりも高校時代に好成績をあげた部員の在籍する比率が高いことがわかる。ただし、中国地区のデータを大学別にみると、高校時代に都道府県大会で優勝した者の比率は、環太平洋大学では回答者数全体の46.7%、徳山大学では同43.8%と、他地区の強豪大学と近い数値を示している。しかし、両大学と他地区の強豪3大学の部員のインターハイでの最高成績を比較すると、ベスト4以上を経験した者は中国地区の両大学で1人、他地区の強豪3大学で4人、ベスト8以上でみると中国地区の両大学で4人、他地区の強豪3大学で11人となっており、他地区の強豪3大学のほうが高校時代にインターハイで好成績をあげた部員がやや多く在籍することがわかる。

2) 大学進学理由

第4図は、中国地区1部リーグ加盟6大学と他地区の強豪3大学の別に、女子バスケットボール部員の大学進学理由を示したものである。これをみると、中国地区の6大学と他地区の強豪3大学の間で異なる傾向がみてとれる。すなわち、中国地区の大学は、「高校の指導者の勧め」(回答者数全体の52.4%)、「資格・免許の取得」(同50.5%)、「大学からの勧誘」・「専門分野の学習」(同各31.1



第4図 大学女子バスケットボール部員の大学進学理由（複数回答）

注) 回答者数全体に占める割合を示す。回答者数は中国地区が103名，他地区が72名。

資料：アンケート調査をもとに作成。

%)が多く挙げられており，他地区の強豪3大学より高い数値を示している。このうち，「専門分野の学習」を選択した者のほとんどは国立大学生であり，一方で私立大学の学生は「高校の指導者の勧め」と「大学からの勧誘」を多く回答しており，大学の設置形態により差がみられた。

他地区の強豪3大学については，「競技実績があり有名」という回答が最多で（回答者数全体の79.2%），これに次いで「高校の指導者の勧め」（同36.1%），「資格・免許の取得」（同34.7%），「整った練習環境」・「専門分野の学習」（同各27.8%），「良い指導者の存在」（同26.4%）が多く挙げられた。これらの回答のうち中国地区の6大学と比べて特に高い数値を示すのが「競技実績があり有

2011年6月 和田 崇・緒方佑衣：中国地方の大学女子バスケットボールはなぜ全国に通用しないのか？

名」「整った練習環境」「良い指導者の存在」の3項目である。すなわち、他地区の強豪3大学の部員はバスケットボール競技を続けるのに良い環境にある大学を選択しており、「高校の指導者の勧め」「大学からの勧誘」を回答した者の比率が高い中国地区の6大学の部員と比べて、主体的かつ積極的な理由で大学を選択し、進学したことが伺える。

IV 選手の意識

第2表は、中国地区1部リーグ加盟6大学と他地区の強豪3大学の別に、女子バスケットボール部員の大学時代の競技成績に関する目標を尋ねた結果を示している。これをみると、中国地区の6大学と他地区の強豪3大学で異なる傾向がみとれる。すなわち、他地区の強豪3大学はほとんどの部員が「インカレ優勝」を目標に掲げているのに対し、中国地区の6大学は「インカレ優勝」を目標とする者は回答者数全体の21.6%にとどまる一方、「インカレ出場」を目標とする者が同45.1%を占めて最多となった。しかも、「インカレ優勝」を目標に掲げた22人のうち19人が環太平洋大学の部員であり、他の5大学では3人のみであった。つまり、他地区の強豪3大学と中国地区の大学、特に環太平洋大学を除く5大学では、部員が掲げる競技成績に関する目標に顕著な差が存在することが明らかとなった。しかし、この結果を中国地区の大学の部員の意識の低さのみを示すものと決めつけることはできない。それは、前述したように、中国地区の大学の指導者でインカレ優勝をチームの目標としたのは環太

第2表 大学女子バスケットボール部員の大学時代の目標（複数回答）

区 分	中国地区1部リーグ6大学		他地区の強豪3大学	
	人数（人）	比率（％）	人数（人）	比率（％）
インカレ優勝	22	21.6	65	95.6
インカレで1勝	30	29.4	0	0.0
インカレ出場	46	45.1	1	1.5
地区大会優勝	27	26.5	2	2.9
回答者数合計	102	100.0	68	100.0

資料：アンケート調査をもとに作成。

平洋大学のみであり、部員が掲げる目標は指導者が掲げるチームの目標とはほぼ一致していると考えられるからである。

第3表は、中国地区1部リーグ加盟6大学と他地区の強豪3大学の別に、女子バスケットボール部員の自主練習量を比較したものである。これについても、中国地区の6大学と他地区の強豪3大学では異なる傾向が示された。中国地区の大学では自主練習を「実施していない」または「週1～2日」のみ実施していると回答した者が回答者数全体のそれぞれ37.9%を占めて最多であるのに対し、他地区の強豪3チームは自主練習を「毎日」実施している者が回答者数全体の73.9%を占めた。一方で、中国地区の6大学で自主練習を「毎日」実施していると回答した者は回答者数全体の4.9%に、他地区の強豪3大学で自主練習を「実施していない」または「週1～2日」のみ実施していると回答した者は回答者数全体の5.8%にとどまった。この結果は、他地区の強豪3大学の部員が高い目標を掲げ、日々の努力を積み重ねているのに対し、中国地区の大学の部員はそれとは逆の状態にあることを示している。

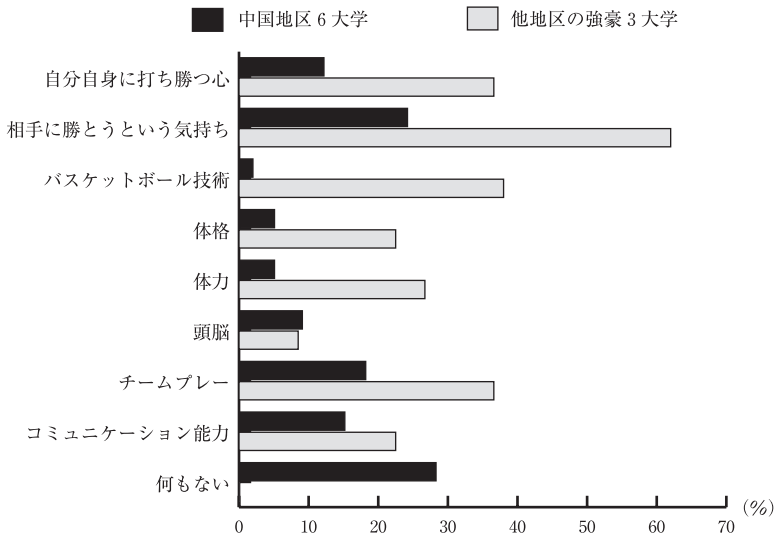
第5図は、中国地区1部リーグ加盟6大学と他地区の強豪3大学の別に、女子バスケットボール部員が他地区の選手に負けたくないと思う点を示している。これについても、中国地区の6大学と他地区の強豪3大学で異なる傾向がみられた。すなわち、他地区の強豪3大学では、「相手に勝とうという気持ち」（回答

第3表 大学女子バスケットボール部員の自主練習量

区 分	中国地区1部リーグ6大学		他地区の強豪3大学	
	人数 (人)	比率 (%)	人数 (人)	比率 (%)
毎日 (体育館+体育館以外)	1	1.0	17	24.6
毎日 (体育館のみ)	4	3.9	34	49.3
毎日 (体育館以外のみ)	0	0.0	1	1.4
週3日以上	20	19.4	13	18.9
週1～2日	39	37.9	4	5.8
実施していない	39	37.9	0	0.0
計	103	100.0	69	100.0

注) 比率は小数点以下2桁を四捨五入したため、合計が100.0%にならないことがある。

資料：アンケート調査をもとに作成。



第5図 大学女子バスケットボール部員が他地区の選手に負けないと思う点（複数回答）

注1) 回答者数全体に占める割合を示す。回答者数は中国地区が99名，他地区が71名。

注2) 中国地区の学生は関東・関西・東海地区の学生に対して，他地区の学生は中国地区の学生に対して負けないと思う点を挙げている。

資料：アンケート調査をもとに作成。

者数全体の61.9%)や「自分自身に打ち勝つ心」(同36.6%)といった精神的要素，「バスケットボール技術」(同38.0%)や「チームプレー」(同36.6%)といった技術的要素，「体力」(同26.8%)や「体格」(同22.5%)といった身体的要素のいずれにおいても，中国地区の6大学より高い数値を示しており，一方で負けないと思う点は「何もない」という回答はなかった。

これに対して，中国地区の6大学は特に技術的要素と身体的要素について他地区の強豪3大学に負けていないと考える者が極めて少なく，一方で負けないと思う点が「何もない」と回答した者が回答者数全体の28.3%を占めて最多であった。この結果から，他地区の強豪3大学の選手は中国地区の大学の選手に対して精神的・技術的・身体的に優位にあると認識しているのに対し，中国地区の6大学の選手は関東・関西・東海地区の選手に対して身体面および技術面

を中心に劣位にあると認識しており、戦う前から心理的に不利な状況にあるといえる。

V 結論

本研究は、大学女子バスケットボールを例に、競技成績を指標としてスポーツ活動の地域差を把握するとともに、それが生じる要因を選手のキャリアと意識に着目して分析することを目的とした。その結果、中国地区の大学と他地区の強豪大学の間で競技成績に差が生じる要因として、以下の3点を指摘できた。

第1の要因と考えられるのは地区リーグの立地場所と運営状況との違いである。関東地区と関西地区、東海地区は、強豪チームが複数所属していて互いに地区大会およびインカレ優勝をめざして切磋琢磨しており、東海地区に集中する実業団チームと練習試合を行うことも容易な環境にある。これに対して中国地区は、加盟チーム数が少ないうえに、1部リーグに加盟する大学間でも競技力に差が存在すること、大学の立地位置や交通条件から中国地区の大学同士あるいは他地区の強豪大学との練習試合を行にくいことなどから、競技力を向上させるうえで関東地区や関西地区、東海地区と比べて不利な状況にあるといえる。

第2の要因と考えられるのは選手のキャリアの違いである。大学進学に際しての関東志向は根強いものがあり、大学でバスケットボールに打ち込もうとする者は、高い競技実績、優秀な指導者、良好な練習環境が整った関東地区、それに次いで関西地区や東海地区の強豪大学を主体的に選択している。これに対して中国地区の私立大学は、学部学科の魅力化、入試制度の工夫、学費等減免制度の導入、高校の指導者との緊密なネットワークづくりなどを通じて、中国地区と四国地区、九州地区を中心に選手の獲得に努めているが、所属選手の高校時代の競技実績は他地区の強豪大学の所属選手のそれと比べてやや低いのが実態である。また中国地区の国立大学は、スポーツ推薦などの入試制度がないこともあり、高校時代に高い競技実績を持つ選手を獲得することが難しい。

第3の要因と考えられるのは選手の競技に対する意識の違いである。大学時代の競技成績に関する目標、自主練習量、他地区の選手に負けないと思う点の

2011年6月 和田 崇・緒方佑衣：中国地方の大学女子バスケットボールはなぜ全国に通用しないのか？

いずれをみても、中国地区の大学の選手よりも他地区の強豪大学の選手のほうが競技に対する意識を高く持っていることが明らかとなった。このことを選手だけの問題と決めつけることはできないが、そうした競技に対する意識の違いが練習姿勢の違いを生み、競技力の差をさらに広げる結果になっていると考えられる。

以上のように本研究では、大学女子バスケットボールを例に、競技成績の地域差が生じる要因として、地区リーグの立地場所と運営状況の違い、選手のキャリアの違い、選手の競技に対する意識の違いを指摘した。しかし、この3点以外にも、競技成績の地域差が生じる要因はあるのではないかと考えられる。例えば田中（1970）は、高校サッカー界でトップレベルチームが育つ社会的諸要因として、上記3点以外に指導者の卓越したリーダーシップ、OBによる技術指導などを挙げており、これらの点に着目した研究を行うことも必要と考えられる。また本研究では、大学女子バスケットボールを例としたが、競技や学校の種別、選手の性別によって、異なる傾向を示すことも想定される。これらの点については今後の研究課題としたい。

謝 辞

本稿は緒方が2010年度に作成した卒業論文を大幅に加筆修正したものである。本稿作成にあたり、徳山大学バスケットボール部の佐藤英雄先生および三嶋隆史さんには資料を提供いただくとともに、数多くの貴重なアドバイスをいただいた。また、筑波大学と大阪体育大学、愛知学泉大学、広島大学、島根大学、山口大学、倉敷芸術科学大学、環太平洋大学、徳山大学の女子バスケットボール部の監督および選手の皆様にはアンケート調査にご協力いただいた。記して感謝いたします。なお、本稿の骨子は山口地理学会2月例会（2011年2月、於：山口大学）において発表した。また、本研究を進めるに当たり、徳山大学経済学会「専門ゼミ・総合ゼミ助成」経費の一部を使用した。

文 献

- 井口 梓（2009）：テニス民宿観光地の形成過程。神田孝治編：『レジャーの空間—諸相とアプローチ—』ナカニシヤ出版、29-37。
- 川久保篤志（1997）：プロサッカーチームの誘致と地域振興—静岡県磐田市を事例に—。新地理、46(3)、28-39。

- 神田孝治 (2009) : レジャーの空間について考える. 神田孝治編 : 『レジャーの空間—諸相とアプローチ—』 ナカニシヤ出版, 3-16.
- 神田孝治・杉本育美 (2009) : ランニングとジェンダー. 神田孝治編 : 『レジャーの空間—諸相とアプローチ—』 ナカニシヤ出版, 68-78.
- 呉羽正昭 (2002) : 日本におけるスキー人口の地域的特徴. 人文地理学研究, X X VI, 103-123.
- 呉羽正昭 (2009a) : 日本におけるスキー観光の衰退と再生の可能性. 地理科学, 64, 168-177.
- 呉羽正昭 (2009b) : スキー場の立地とその変遷. 神田孝治編 : 『レジャーの空間—諸相とアプローチ—』 ナカニシヤ出版, 38-47.
- 小長谷悠紀 (2009) : サーフィン文化の形成と空間というメディア. 神田孝治編 : 『レジャーの空間—諸相とアプローチ—』 ナカニシヤ出版, 59-67.
- 小林秀一 (2002) : スポーツ選手の生活と意識. 愛知学院大学教養部紀要, 52, 41-61.
- 佐藤大祐 (2009) : ヨットの伝播と受容. 神田孝治編 : 『レジャーの空間—諸相とアプローチ—』 ナカニシヤ出版, 18-28.
- 白坂 蕃 (1986) : 『スキーと山地集落』 明玄書房.
- 新藤多恵子・内川 啓・山田 亨・呉羽正昭 (2003) : 菅平高原における観光形態と土地利用の変容. 地域調査報告, 25, 19-45.
- 新堀通也編 (1973) : 『日本の教育地図《体育・スポーツ編》』 帝国地方行政学会.
- 田中鎮雄 (1970) : 高校一流運動部の事例研究—特にサッカー部におけるリーダーシップの研究を中心にして—. 日本大学人文科学研究所研究紀要, 12, 175-198.
- 田中鎮雄 (1975) : 組織剣道人口の地域格差—剣道の地域伝統性に関する研究の試み—. 武道学研究, 7 (2), 6-12.
- 田中鎮雄・松下三郎・田辺英夫・久保木優 (1977) : 組織剣道人口の移動現象. 武道学研究, 9 (3), 23-28.
- 花島裕樹・西田あゆみ・呉羽正昭 (2009) : 黒姫高原におけるスキーリゾートの変容. 地誌研究年報, 31, 1-19.
- 松下三郎 (1978) : 武道人口の格差からみた地域伝統性の一考察. 日本大学人文科学研究所研究紀要, 21, 115-124.
- 守屋秀一 (2006) : 総合型地域スポーツクラブ参加者の利用行動の地域的差異—岡山市—, 瀬戸内地理, 15, 1-16.
- 山崎利夫・高阪宏行 (1996) : GISを利用したスポーツクラブのサービス圏の分析. GIS 理論と応用, 4 (1), 27-36.
- 山崎利夫・高阪宏行 (2000) : GISを利用した商業スポーツクラブのサービス圏の分析—福岡市を事例として—. GIS 理論と応用, 8(2), 77-86.
- Bale, J.(2003): *Sports Geography (Second Edition)*. Routledge (London).
- Terrell, S. (2004): *The Geography of Sport and Leisure*. Hodder & Stoughton (London).